

洛陽攻略作戦に参加して

千葉県 佐久間 正 夫

私は大正十年二月十一日生まれです。現役兵として昭和十七年二月一日、東京世田谷の東部第一二部隊留守部隊（近衛野砲兵連隊）に入営しました。二月五日、野砲兵第三十二連隊要員として東京を出発。二十二日、現地北支山東省^{えん}兗州の第四二五七部隊へ（連隊長櫻井大佐）馬中隊に入隊、新郷において三カ月の初年兵教育を受け（馬六頭立て）ました。人と馬との教育など考えても見ませんでした。口には出せないつらい三カ月でした。

その後、戦車第三師団（薄）野砲隊機動砲兵第三連隊に転属、ここで約一カ月牽引車の教育を受け、各部隊に編成替えとなりました。

昭和十七年十月三日、ゴビ砂漠の包頭県に到着し、周囲の治安維持と警備に当たりました。昭和十八年四

月から二カ月、京漢作戦に参加、このころから部隊の南下が始まり、何が起こるか分からない行動でした。作戦、作戦の繰り返しで、毎日が戦場の中です。後から聞きましたが、このころから河南作戦の始まりでした。

昭和十九年三月（日時は忘れた）夜、出動下令、夜陰に乘じ黄河の渡河作戦が強行されました。暗闇の中、人・馬・車が肅々として進む。「山河」の暗号を意識しつつ前進するや、突然対岸から敵の機銃・迫撃砲・曳光弾を交え集中攻撃を受けました。しかし、我が部隊は一人の負傷者も出さず夜明けとともに渡河作戦に成功しました。南岸の敵地、霸王城をまず攻略し、怒濤のごとく一路鄭州へと進撃しました。ここで敵の要衝、洛陽攻略戦であると聞いて身の引き締まる感動を受けました。

昭和十九年四月ころ、楚河鋪付近に差しかかったとき、吉松部隊が敵と交戦中であり、吉松部隊の要請を受け、我が小池中隊は援護に回りました。堅固なトーチカ陣地に対する歩兵部隊の総攻撃に対し、我が野砲

部隊の援護射撃によって敵を撤退させたのです。

敵の要衝洛陽近しと行動中、臨汝鎮街道にさしかかったとき、突然敵機が飛来し、機銃掃射を受け、数名の死傷者を出したことが残念で、私の心にいたく刻まれて悔やまれてなりません。このショックを受けた我々は、反面義憤に燃え、士気は一段と高まり、中隊は白沙へと進みました。ここで部隊を再編成され古都重要拠点洛陽に進撃し、昭和十九年五月二十五日多数の犠牲者を出しましたが陥落させました。ただ今までの戦闘等で犠牲になられた戦友に対し、心からご冥福を祈ってやまないのです。

昭和十九年六月十五日にこの地を離れ、河南省襄城警備に就き、階級も上等兵に進級しました。私もようやく一人前の兵隊になったと喜びました。

昭和二十年三月二十日ころから襄城において初年兵（補充兵）教育を三カ月ほど行いましたが、そのころから何となく情勢が悪くなり、教育隊の出動も時々あり、教育、警備、出動の繰り返しでありました。

昭和二十年七月二十五日、ソ連参戦の情報により北

進し北京警備のため、長辛店に着任しました。

昭和二十年八月十五日、北辛店において北京守備のため、毎日重車両の整備、調整、出動待ちでした。そして昼の食事を取りに行つたとき、同年兵から日本敗戦の情報を聞きました。

ソ連の裏切り参戦と、玉音放送により確認しました。我々は日本はあくまでも勝つと信じておつたのにと、全兵士は皆怒り狂つたようであつたことを今でも覚えています。敗戦となり、中隊は北京の紫禁城庭園に移動、テント兵舎生活をしつつ紫禁城警備に就き（兵器はそのままと携帯）しました。

八月十五日付けで陸軍兵長に進級いたしました。復員下令は十二月五日ごろであり兵器は取り上げられ、塘沽より米軍上陸用舟艇により昭和二十年十二月十四日佐世保に上陸、帰途につきました。

十二月十八日ごろと思いますが、突然帰りましたので家族（当時祖父母、父母、弟）がよく生きて帰られたな、と皆さんに迎えられ喜んでいただきました。